

静岡県大教職専門「総合」受講者に学ぶ探究活動の可能性の豊かさ
ー生活科・総合の原点が問う公教育（公立学校）再構築の道筋（１）ー
米津 英郎（静岡県富士宮市立大富士小学校校長・静岡県立大学非常勤講師）

1 生活科化する学び

小学校生活科の理念を取り入れた大学の授業がこれまでにあっただろうか。小学校生活科誕生期に貢献した馬居は、大学の授業を生活科化した。馬居の授業は、小中学校で目指している質の高い深い学びを引き出す授業、「アクティブラーニング」そのものであった。

2024 年 10 月、文部科学省は、次期学習指導要領の改訂に向けて開催されている教育課程企画特別部会において、「アクティブ・ラーニング」について次のように述べている。『『アクティブ・ラーニング』は、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善に留（とど）まるものではなく、子供たちの質の高い深い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものである。』

しかし、小中学校において、馬居が生活科化したような「アクティブラーニング」の授業が展開されているとは言い難い。授業者が計画した構想通りに子供たちが活動している授業が多く存在しているのである。

そこで本研究発表では、教職専門科目（静岡県立大学）において、生活科の理念を取り入れた馬居の実践をヒントにして、探究活動の可能性の豊かさについて考察することとした。

2 生活科化した教職専門科目（静岡県立大学）における実践的研究

2023 年度後期、教職専門科目の「総合学習の時間」（栄養生命科学科 栄養教諭免許取得希望）と「総合的な学習の時間の指導法」〔(食品栄養科学科、環境生命科学科 高校理科教諭免許取得希望)〕の受講生 10 名を対象とした、授業者馬居による 16 回の講義に参加する機会に恵まれた。その過程において、学ぶ意欲が高まり探究が深まっていく学生の姿を見ることができた。一見すると学んでいる様子は、小学校生活科の初期の授業のようであった。そこには、授業者からの指示はほとんどなく、学習者が対話を繰り返し、学習形態を自由に変化させて学びを深めている姿があった。馬居が生活科創設時に貢献した見識を生かし、大学の講義に取り入れた“生活科の理念”に基づく探求活動の原則は以下の 3 点である。

- 1) 環境整備：①授業者一人で指導しない。②多様な活動を保障する教室内の机・椅子の再配置。③教科書を必要とせず。④時間割を活動状況に即して自在に組み立て直す。
- 2) 引き出し、待つ指導：①指導助言等の時間はほとんどなく、探究活動過程で生じる質問への応答を重視。②学生の求めと必要性に適合した資料提供と活動の記録 (LINE の活用)。
- 3) 学びの価値付け：①全ての学生の意見を肯定的に受け入れることを前提に学びに向かう態度や考え方を認める。②模造紙等を用いた学びの発表・発表の評価及び価値付け。

3 成果と課題

2024 年、馬居の実践をヒントにして富士宮市立黒田小学校において取り組んだ実践がある。それは、小学校 3 年生以上の有志が休み時間を利用して何度も参集し、学校の新体育館建設に向けて活動した実践である。その具体化の詳細は映像・資料等を用いて、発表時に提示する。また上記“生活科の理念”に基づく 3 種の原則の詳細論は馬居の発表に譲る。